

国立国会図書館 古今役者論語魁 2巻 208-32

ガラス使用

古今役者論語魁

上

208
2
32

古今

序

故誌乃世家に曰。訥子名はるす。初手
 の名はるす。序。その先系人素利。父は
 三木の校。母はあつ。元禄二年己巳
 の年。十一月。官位をもつ。訥子と西上京
 此舊宅に在。能書とく。常々
 徳と定たひ。謙謙と好。も十席に





及むろのど。皆ある終あり成あり上あり大極あり。至極の
 佐のと成あり。真まことの極ごくと成あり。室曆六年
 丙子あひだ正月しんげつ三日みかの油子あぶらこ死あす。年六十八
 洪あき子こ新あらた寺てら所ところ 忠ちゆう孝かうと成あり。葬ほうご
 としつと。始はじめに何なにも尋たずふと志こころす。

辰のま

新翁題

凡例

一世よに芝居あしや端はなと云い者もの希まれあり。又また至いたて好このも多おほくぞ。
 其その故ゆゑに年とし仲なつ芝居あしやと云いる人ひとに評判記へうはんきと云いふあり。
 終つひども今いまの役者やくしやの上うへ手てあり。足あし物ものに上うへ手て出で来きて。狂言きやうげん
 の若わか者ものの難癖なんへく或ある足あし出でを故ゆゑ今いまの役者やくしや此こゝに
 依より。並なら大身おほしんのことに依より。依より。今いまの役者やくしや大おほ全ぜん歌うた
 舞ま妓ぎ事こと始はじめ。役者やくしや都みやこ細目こまめと引ひて。見物けんぶつの意い味あじ
 成なり。之これの津つ役者やくしや評判記へうはんきの評判へうはんあり。

古今語

凡例



古今語魁

一室曆年中に出る耳麿集ここんひまは古今の秘書を
 どもざんろく元禄時代の役者をうりて考ひとま知人あり
 それこのまよ支故まうほうば書あらいいこおん享保あぐあ己未あゑりの古人あゑりを多集あゑりりあゑり言あゑり紙
 歌あゑり舞あゑり妓あゑり一道あゑりの秘書あゑりあり

凡例続

古今役者論語魁物目錄

○上の巻

- 一 極位の細評
- 一 名人の極
- 一 不似する仕の極
- 一 當時の評判記に戸見物の變化
- 一 役名の本忠と並の由来あゑりに 大室由良之帥の
- 判

論語魁

目録

○下の巻

一 津子作を傍祖言を吐同役者批判

一 中村傳七祖言をわし

一 元祖市川團十郎荒きもの公け

一 元祖中村七之郎舞臺の傳

一 二代目何れに云ふ山平京あ元祖竹傳を祖あ之幕

一 元祖心中平九郎実恋の傳 あびた 祖言の仕組

一 元祖市川新四郎立二丈

一 元祖坂本亮之助武道の事持 あびた 軍のたよ

一 元祖大谷友次郎藝の仕組役の多少 あびた 不敗の

ころりかけ

一 元祖市川おたあふ他の事持

一 元祖市川宗三郎実恋の事持

一 二代目大谷友次郎舞臺の事持

一 松清翁子伝阿房の衣裳

一 古川菊之丞不化子地藝女形の傳

論語註

目録

一 義実五十相傳 市川海老蔵 助五郎之助 故実あり

目録終

古今役者論語魁上

評判

○ 極位の細評

一 元禄宝永時代の名人の立役り（元禄）。元禄坂田菘十郎。
山下京右衛門、二代め嵐之右衛門、元禄中村七之郎、元禄
市川團十郎、若女形（若女）。菘屋辰之丞、元禄水木
辰之助あり。然るも此時（このト）の評判記（い）以上上吉より
上の位付を。正徳（せいとく）は、菘屋辰之丞、元禄水木
辰之助、元禄芳沢あやめ、元禄中村七之郎、元禄中村七之郎、元禄

論語魁

上

か



中村座初下の良見せ。天下太平記は楠の妻菊の
の役。大根漬の仕占を此大阿。切原の札
七時。賣切。和の終。此時極上上大吉。小
書は無教と付。名人の分。極位。極上上吉。
あやめ八幡。名人故。津。藝。古。書。
至。名人。元祖。長十。元祖。大和。甚
た。実悪。元祖。中平。九。若川。若女。

元祖。八重。桐。十。若。右。市川
門之。以。元祖。新。中
村。四。市川。十。中。新。九。若。平。九。若
女。若。中。富。十。若。芳。若。極。元。文。極。上。上。若

論語魁

上

二



市川海老蔵。極上上吉沢村宗十席とある。びりしり。
更亭比をりめまが同位ありしが。比亭之寅年宗十席。
京都中村桑太所座。白見せ大何よりまて。極上上
吉。二の何より大く當りて無教とあり。此時江戸を海老
蔵へやまり極上上吉有りしが。宗十席翌年長十席と
改名し。江戸中村座へ白見せ。海老蔵と十六年より
の出合まで。たゞこれ大何よりまて。海老蔵は江戸乃
名物故長十席と無教と云ふべし。故人引合ふし。

大極上上吉。小言は根生海老蔵。無類長十席と云ふ。二の習
長十席まて。大出来大何よりまて。此時無類とある。
海老蔵は極上上吉あり。故人同座の内。海老蔵は不當
あれども江戸中が吞込で。上は立派だがせんせぬ妙あり
大立物故巻頭あれども。長十席と無教とせし事。
江戸中の風は不合仕方との評判も。翌年も同座を
の被見せ。海老蔵大何より故。長十席の無教と取て。海老蔵
よつけ無教の位故人まて。有教と云ふものありとて。長十席

論語

二

三





とび至極上上吉と有り。然れども友人あがり。無教のらくのよ
 相遠かるれば片端はあり故に宝曆元未の良見をより。海老
 蓋の無教をよりて。新に海老蓋を大至極上上吉と一。
 長十席を真極上上吉と下せし。友人ともに持藝まで。
 是さるりの位付あり。又位付の内へ名人上手と書入し。ま
 も有り。其後長十席は。即高屋高脚と改名して。るもあ
 古人とありし。故に海老蓋を無教と書載たり。然
 れば極の上を越位付。元祖あやめい格別。栢葉訥子の友人

極。末代小沢で見ぬ人も。評判記。無類の部大至極上
 上吉市川海老蓋。真極上上吉。即高屋高脚と有り。と見て。
 名人のちどを知あり。近年没者の位付高過たりと
 云説あれども。栢葉訥子のをれ故に。如斯の大位を以路
 たり。めつぼうし。大極上上吉と付くるよ。何れ。又是ホ
 と考て極位を軽おもふ。非あり。極の上を付役し。や
 折ふし。出来ちどあり。栢葉訥子の位も。賞義又
 あり。昔より名人の位は極上上吉あり

論語魁

上

ロ



○ 名人の極

一立役名人の用山へ元祖坂田十席不極う。古き役者
大全より詳あり元祖尚之右夷を名人の根えとして。
だんく名人育といふも。後十席より不及り歌舞妓
子始中へ耳塵集より白をれはるり九いふ不及
一代和りの大阿より。後を伊た夷の役根えして。十八
席の大入。六十席の法を述て。傾城賞のうりしり。他
の役者の不及仕由。知る妙を得る上より名人。未代

一も有間後くとおもん。市川海老蔵の用山より。
志なきくの仕由。大阿より。年々故其好と云ん。
矢の孫五席。鳴神使者男。御六うおろし。賣とをどめ
家の狂言とあり。幾度もおおど。義とての大入を
おわて諸役者の学より。凡物乃知とて。身一奇
異不思議の教。色放不動と。随とて。形像の仕由。衆
た。く。狂言の仕由。不出来。よもよも。何よりを
取。名の。元祖。園十席より。とて。も。度。ま。も。夢

論語魁

上

五





といふごとく。自分より万能と思ふも。多の門より極て甲乙
 出未あり。安と考て我好きぬる事いせぬと以て上
 と呼まれり。然にき即万能といふ。何役もても持
 の仕ゆより善くする事なく。何は海一いつまもそい
 曾我十郎。名古屋山一郎の色するい得事とのりて
 数年の参り取何やや庄九郎。彼の五郎兵衛の略る
 重忠祐隆のくゝい。孤忠信。宗徳のあくる梅のや
 会系。志母の身た来つ。男仔達。徳盛の多悪い。この程

太の略る悪百姓を後他の道外形。依のあはうたして。
 至るる。右阿比音八も是と似たり。親仁形もてん
 平登屋久右衛門花車形。その本津身母。教柄のよせ
 女形。義仲の角かぼろ。若形。形よままで。あところなく。
 将門七役の仕ゆ。い人品。手持い勿論。はたかをもそれよ
 遠おる。人とも見へむ。子勢のせむ。外は教
 大伴の黒主の夜冠。姿の言上。加志。か。い家のもの。板
 云に不及。一躰。あつさる。居。あ。身と。か。

論語魁

一かろ十子で維癖のあは仕内其上は依り古々にてあむ
 あは調子それ申考付は上波子と云ふ三ヶ津よその
 言名中この其以て若女形の相手とありては
 引立られ格別に見え一掌諸人の知るところありかゝる
 希代の上手あれども死氣に江戸見物者古十町奥
 楽を用い依り調子も時よあると云ふと云ふと云ふ
 ようく始端を考に時代を遠ども坂田市川柳言を
 之名人ともいふあはあり

一実悪の名人元祖山中平九郎に極
 一歌後よその元祖大谷廣太郎道外形よその西國兵又形
 親化形よその四の宮源八花車形よその枚九兵衛これ等
 この役は名人あり
 一若女形の祖元祖若芳以而あに止り古評よその二十
 年若過をば紫はじの妻よその免判と抑て世界の
 女形よその若女形の用山とあれはそよえに不
 と村大吉よその若女形名人根えとゆひも大若

論語魁

二





評利をうらん。一幸に戸森田座にて。曾我十郎下宮
 傳吉。大儀のそつに以て。白仕組ありしが。
 十郎のさる場を引うけ。ユ夫を以て。大あつりせし。昔
 より。妙もあつた。末の世も。又有同交。若女形の開びの
 評判。一鉢の場。一々物敷い。と。時の女のやうたひ
 ありし。中真。よそに。川島。と。座。後者。大金の序

是の他。子あま。地。子。た。と。書。一。人。よ。ま。て
 武道の仕。の。り。あ。ぶ。し。女。の。業。ハ。け。道。を。け。あ
 城。身。懸。歎。ん。云。に。あ。ぶ。だ。に。間。の。侍。女。を。神。の。家。の。義
 と。あり。道。成。寺。石。橋。と。の。名。を。大。切。の。女。形。と。し。より
 て。い。を。此。げ。う。も。色。守。の。う。と。く。あ。ら。い。勿。論。の。り。あ。る
 に。六十。に。あ。る。ま。で。振。袖。の。思。を。る。子。至。極。あり。い。う。ら。し
 たり。が。り。よ。あ。ら。び。妙。を。得。る。る。子。は。こ。と。に。伸。右。美
 女。形。の開。山。是。あり。又。中。洲。川。菊。次。席。ハ。一。鉢。仕。組。細



よしとせし頃城事。思れり世活事の名人。去りたる
 いちその随一武道事にありても本の女の仕切花を
 ししと。評判記に極の字をありとあそむりし。微塵も
 せしたあはれ事とせむ可矣味うるは故あり。実とせしと
 多し故。りしとも狂言と云ふを。終末を似城より袖
 の思れりよりし。花あると云ふはあはれ者記は女形は
 中一かあり。ありすぬし。中二仕切と。後十席やせし
 よし。女も仕切も菊次席にあり。又舞臺百子様に若女形

いろと不交かかんぢんありともあり。享保以来の上手な
 人と噂。女形。大いなる武道からしと。女形の才とく
 づ。又若衆形こそあてしるも。其中に菊次席の女の
 名人あり。何る老人おろし。より多の女も見しり。
 仙真のやうなる貞女いかにと。登りて終り。いろと
 聲。せむをいまで。色をゆくと。を考ても女と命に
 おもひれど。にたさるるなりとむすまを。通地。通地。通地
 あり。宝暦四五年の頃の仕切上方人に見せたりし

論語魁

上

十

從者目
あや神
三ヶ茶
谷早八
九ヶ茶
此の語
の相違
八ヶ茶

に。古人とありし情うや。あやまをうらに付ても
 菊次序仕ゆ一十叶。二十ヶ葉の名言と讀たる。流石
 あや免の名人まて菊次序ハ一生男のまを存をも不短
 平生のた一あま。ま持諸義。女一道は通達せしハ
 洲川先才に極。無れハ見くも位あれも時つてはて
 極位あり。その菊も恐た一あまの志くは。ま持諸義
 自然と親伯父に遠り忽れ。年若あれどあそろしハ
 り。

一若底形の名入。小野川宇原佐あり

○孤他事仕の極

一孤他事仕名人ハ七化後三挺彼の根元を役佐渡傷
 長又序。若女形まてハ七化若原丹系幾通のこんだん。
 元祖本辰之助中具まてハ右洲川菊之丞。今中村
 富士序に極。諸人何ぞに元まよ盛かづは。
 一市村抱た赤椀馬の拍子ハん夫娘をあれた白物あり。
 一六法丹赤ハ元祖嵐之太夫。二代目何しハ元祖中村

論語社





七之席。何じ新子。當時より中村女長に戸一家一流也。
一系譜の役へ。松本幸四席に極別しく因破の仕口。二代
の大阿つりあり。

一月本武者之助の役へ。元祖坂本素之席に極一々。
船々やどけ尾上菊又席方増多り。

一番時角ゆげく素袍よ替の仕口。是怪申る百性新
の藝へ。市川團藏に續く者おし

一中山文七に戸へ下り。鬼王新姿。又男仔違命との仕口。二谷
大谷廣治に臨城切りその大希り。下を兒ハ残念あり

一芳沢あや免世活りの憂。當時外に仕人おし
一実悪まへ中村歌麿。若女形よへ中村糸太席。是より以下
評判略之

○當時評判記に戸見物の變化

一近年に戸評者といふ。之を律評判記ハ古来より此定式故諸
人は是誠困ル事大方あり。然れ聊も無理有りて其おし。然に近
頃の評判は見れば法にむすべし。又尚と感情上無言文も亦
大出まると悪言の類を見者の意の付ざる場を書き



細ありともあれども。物心あり見物と珍と趣向のやうそ
 へ。本許といへば。さういふ中む。仲義水との
 仕内。あれども。ま指搦りにして。と下り。いかに人
 あり。昔より。役者。當役者とり。いふ。我未
 中村。中村。出世。中村。を見て。と。仲義。と。て。見た
 年中。何より。役の。いかに。半角。あり。中村。役。の上
 上書。より。実。悪。あり。上。上。書。何。の。替。れ。つ。て。初。て
 工。役。の。役。を。當。た。れ。ども。位。より。と。く。後。任。より。と。四。又。年。も

を。何。の。評。判。あり。也。が。実。悪。一。年。と。そ。此。上。上。を。に。あり。
 ま。と。後。任。と。動。た。れ。ども。不。當。ま。う。二。代。め。の。大。家。實。任
 と。お。義。と。く。各。口。男。侍。途。あり。凡。義。と。く。と。名。と。い。は。し。
 何。座。此。後。任。の。際。に。民。の。後。任。を。た。た。ん。感。任。の。借。り
 し。を。仲。義。も。位。より。次。あり。れ。ども。ま。よ。た。た。衣。初。て。乃
 工。役。も。大。何。より。総。合。と。い。ふ。あり。ま。よ。も。あ。く。相。言。と。不。出。来
 ても。獨。何。より。と。別。し。と。山。聖。定。九。席。の。役。の。大。家
 独。の。た。る。もの。又。い。箇。坐。と。う。が。り。赤。合。お。よ。その。仕。心。あり。と



今^{いま}幸^{あき}くそ^そ陣^{じん}の^の役^{やく}付^つと^と志^して^ての^のあ^あも^もひ^ひを^を仕^し込^こめ^めの^の持^{もち}
 と^とつ^つ。名^な人^{ひと}無^なき^きも^もそ^そこ^こ交^まあ^あぐ^ぐ大^{だい}如^{にょ}来^{らい}。我^{われ}亦^{また}喜^{よろこ}ぶ^ぶ。然^{しか}れ^れも^も明^あ
 遠^{へん}に^に知^ち己^この^の人^{ひと}何^{なに}れ^れが^が。定^さ九^く席^{せき}の^のを^を教^しと^と巻^まく^く。こ^この^の上^うは^は。
 て^てい^いら^らの^の清^{きよ}盛^{せい}大^{だい}致^し成^{じやう}務^む何^{なに}り^りが^がて^てい^いに^に。幸^{あき}を^を付^つけ^けた^たら^らん。
 実^{じつ}悪^{あく}の^の極^{ごく}位^ゐへ^へえ^えと^とな^なり^り。皆^{みな}に^に仲^なあ^あす^す。定^さ九^く席^{せき}の^の行^{ぎやう}義^ぎ
 々^々も^もた^たり^り。ま^ま者^{もの}の^の姿^{すがた}を^をた^たゆ^ゆに^にし^し。仕^し込^こめ^めの^の上^うは^は。ま^ま者^{もの}の^の行^{ぎやう}義^ぎ
 々の^の評^{ひやう}判^{はん}。こ^この^の足^{あし}物^{もの}の^の裏^{うら}を^を行^{ぎやう}知^ちく^く。定^さて^て仔^こ細^{さい}何^{なに}り^り
 愈^いに^にさ^さす^す。愚^ぐ拙^{ちやく}の^の不^ふ善^{ぜん}も^も亦^{また}も^も評^{ひやう}判^{はん}も^も

ろ^ろり^りて^てい^いが^がは^は。物^{もの}役^{やく}者^{もの}と^とよ^より^り。秤^{はかり}に^にを^をて^て度^ど量^{りやう}三^{さん}寸^{すん}目^{もく}む^む
 じ^じや^やう^う茶^{ちや}茶^{ちや}を^をて^て面^{めん}白^{はく}や^や。又^{また}に^に戸^と見^み物^{ぶつ}の^の一^{いつ}觔^{しん}足^{あし}や^や
 あ^あら^ら。そ^その^の澄^{じやう}扱^{じやく}は^は。い^いら^らの^の狂^{きやう}言^{げん}も^も。或^{ある}い^いな^なら^らり^りな^な
 詮^{せん}養^{やう}の^のた^ため^め身^みを^を晒^{さら}す^す。人^{ひと}の^の刀^{たう}を^を後^ごて^て寸^{すん}尺^{せき}を^を何^{なに}ら^らむ^むん
 い^い切^き筋^{しん}より^{より}。お^おと^と巻^まく^く人^{ひと}を^を殺^{ころ}す^す。刀^{たう}の^の血^ちを^を拭^ぬぐ^ぐ。遠^{とほ}く^くより^{より}
 頬^ほの^のか^から^らの^の足^{あし}巧^{くわう}者^{もの}へ^へお^おと^と巻^まく^く。先^ま年^{ねん}市^{いち}村^{むら}座^ざを^を梅^{うめ}極^{ごく}二^に
 人^{ひと}悍^{へん}丸^{まる}の^の狂^{きやう}言^{げん}に^に。お^お何^{なに}れ^れし^し七^{しち}又^{また}席^{せき}を^を改^かめ^めと^とあり^り。料^{りやう}理^り人^{にん}を^を
 按^あ摩^まし^しを^を打^{うち}殺^{ころ}す^す。何^{なに}れ^れし^し下^げに^に。お^お何^{なに}れ^れむ^むこ^こん

論語魁

七

十五



よて見たり。に戸見物のみとかけ夢のある知らん。そ
 へそ勿論の仕ゆと知るべし。さればこそ去々梅幸
 大友常陸守の仕ゆ。財主の再東あれども。真の義也。
 伴孝のふれを。骨折換とありしもをあり
 ○切手本忠臣義由東あひに大星忠良の評判
 一切手本忠臣義由の略ハ。財主の村長十席の事也。
 此書三寅年京都中むら条太所座之宅。自見せり。時
 乞まで。何れも。後まで。前の坂田も。山下も。をた。あも。あよ。た。あ

とのえゆ。別して大友宮内の仕ゆ。前方よりたゆ。も
 勤る役あれども。是ゆとある。白後とて。亦と有る
 此書の評判。此宮内の役ハ。大友数四十七本。とり。相言。よて
 勤む。その大。何れ。是。別。大。友。一。坐。良。の。仕。ゆ。あり。是
 と。元。始。忠。臣。金。乃。短。冊。の。意。味。を。知。れ。名。目。を。替。て。乃
 然。白。これ。元。始。と。知。れ。但。故。人。形。と。下。の。外。の。忠。良
 一。ゆ。ハ。後。知。二。巴。あり。長。十。席。中。良。の。仕。ゆ。ま。ゆ。の。效。知
 一。ゆ。角。の。四。大。の。字。あり。ま。に。よ。て。を。以。の。字。す。所

論語

二

十六

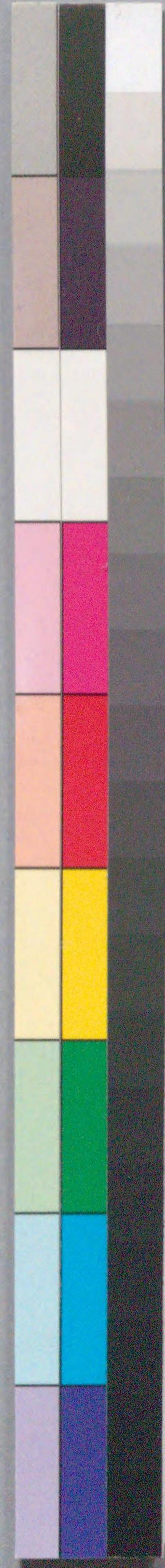
208
2
32

言言魁

十七

尾上菊又片に越る十目の足知あり
 ○評に曰上よハまゝ九身一あり此九身とハ事。位事
 と略る此別々々の事ハあらず。同立髪上下下ても
 衆の他衣裳此物好に玉まで其時々の役に相成せ
 ざれば。直の上と下とハ云難し。然ども是を足分見物
 あり時ハとももろもれする。財言をまき人ハかだる
 なるん。是當時見例の要あり

古今役者論語魁 終



古今役者論語魁

下

208
2
32



古今役者論語魁

○古人他者の傳

秘書



一津打治を傳曰。狂言ハ武妻目の緒より他。治して妻
 目之妻目と案思ふるがは。物を他ハ恐あらず源氏物語
 狂言他の秘書として須摩の石の巻より出来治して案
 後六十帖出来あり。狂言と案に。その年の座既の能
 事と案思てハ出来義あり。座既の巻の隨分惡
 りと案して。除くされハ能事殘あり。狂言役者に

論語魁





つれる時、取立するあり。まに入るに他が狂言他あり。
 紙登に其紙のあゆみならず。つれてもゑておぼえりぞ
 の年、其狂言役に立大入にあり。是まで是より
 つれても狂言の破朽ものこそありし
 一五百あえ役者と。式百あえ役者。二百あえの執事遠より
 尺くむ。二十あえ中通。二十あえ小結といふ大まに遠あり。
 ちる金とらば心づけ有る事あり。立役のち敬敬役
 悪がを敬女形へ入る者をも敬あり。

一 中村傳七曰。狂言の繪のごとく他がは。文字のやうに他てい
 女子どもよあず。尺物の尺の苦勞を忘に來あり。

○ 古人役者藝出

一 元祖市川團十郎曰。去津を返へ糸清酒のち持致せ
 一 糸。糸事として尺をよめる糸意あり。然に糸清の
 徳も糸清の肌とのだ。御書院の障子襖と踏折け
 と。御側の人くみくと糸思ふ。一時は糸清事として
 糸清とやとられ。糸清前立機嫌よく。糸清物としてたり。

命書社

大名の前も怖て荒るもそはあし。

一 元祖中村七三郎曰舞臺に長居する下手あり。役者
者ハ本道歌舞妓役者ハ外科にて上より見て瘡あり
藝ハ小柄の彫物のごとく。後ゆくても悪あまやに仕交
花もも梅の花のやうに交交ものあり。

一 古人に云々の幕有り。二代め嵐三右衛門の身替と云
てんとて思案とする時。女房守たる。烟草盆と持あり
ちこつちと歩行。思案一あづく唇首の方と欠け。

笑思入とする。笑もて尺物一時に笑そそやあーくしてハ

思案ハ出ぬごとく柏子幕は是一つ。山下京左衛門家老此

死骸と枕鳴百性よそこまぐと。あーける有てもよよいて

まよと女房とやア。たれ恥と撃たん。尺物を値て

静に恥と撃。思案の爲に死どろ。そよとやと髪と切り。

今此時に悟ず。ろろ悟ん。切原の舟に等しして。

彼家に入ん。南堂阿弥陀佛。ちよんくと幕。静

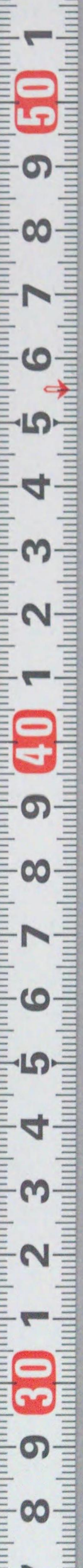
に花道へをめる。是ニツ。元祖竹崎を夫上使と上げ。

長道く行人として張合があい。後子の庇れますと素
徳にあり。柏子と借て。いて素まぢふとちんく。と莫中。是
こ。是と三幕とてにりふあり。是ととる役者古々
にありし

元祖心中平九席曰。実悪いせりぬがよし。不ひ胸
く思案して。若がよし。とぞ。平九席の元末意地悪
れ男あるが。義へ上よ。とてその中村。女長子役の時。万
して平九席。金石の役。とて。初て。逢狂言仕組あり

が。我の誰が子。いと向とれ。さんひととせりぬ。そ。う。で。り
あ。いと。武。松。遍。を。う。り。と。ま。さ。早。坂。女。長。子。心。を。ま。ら
え。因。を。と。ほ。し。あ。が。う。さん。ひと。と。ま。れ。ば。ま。が。よ。い。川。ほ。を
付。と。親。の。敵。あ。れ。ば。恨。し。あ。と。と。ま。ふ。と。す。れ。ば。た。の。う。ら
因。が。と。ほ。ま。は。と。平。九。席。の。う。い。せ

一。元。祖。師。川。新。四。席。曰。ま。と。仕。組。に。お。兵。あ。れ。ば。随。分
敵。役。に。負。や。う。に。ま。と。仕。組。家。子。負。と。思。と。と。ろ。と。結
ハ。強。く。な。る。あ。り





一え祀取本彦之序曰侍の役仕時ハ樂屋ノ入てもおの
 方と不放るあり。吐にほれ逢出一時亡然ても勝の
 何んが武士あり。又若くは出来せー役ハ軍も回ら
 して。年よりてを居れば着た時の手柄未代までも
 不忘ものよ。後くの人吐傳へても手柄あり。とく角
 倒死しても氣をとさるんよ。て下手にても上手にても
 役者ハ止れぬものあり。役者の身と能あるも
 金よりハ先衣裳が先くほれば能あるなり

一え祀大谷廣流曰。藝ハ日向でさるかに仕あかよし
 日影でさるや。か藝でハ悪く日向あてて藝をとさる
 来不け。狂言の仕内一日あても宅役とよハ。翹草
 一ふく吾ほどの目と考れ。評判もよし。役の多
 ハ出来。藝思ものよ。生るも死するもかーの目と考
 能事。〜ともよ。回するハ皆悪変あり。又役者ハ不
 お織と忘れハ年寄と云る。大谷の小袖あどげら
 かつ。帯物あどよし。袴ハ。下まの目



右丈柯木の取仙の相言をするをよめてぬりて付くは
 一畜生の杖の尺の乳よりとよめて切は一人居のハ乳よ
 里下くよし是は縁田毒の取仙あどに入事あり
 一女の虚に惚て抱付とれたハ男の友の手比とより抱付
 顔と傍くむけ酒あり。身実惚とれたハ行くたの方の
 下へさし抱付ハ直虫のやうに居るあり
 一女の飯をたぐりぬりぬより氣に先帝ものあり
 一家老の女房の後て不器量ある年持にてする事

あり
 一眉毛濃が墨よそ他がよし。他てハこころ及く侍あり
 一風俗能くやるハ。常れ腰の細く小藩園と入て。布
 してまきかよし
 一年の考くぬり。硬紅と焼。痔をぬに敷くぬれぬ。皺ん
 よぬぬものあり
 一女形ハ女の貝貝負するハ甚悪た事にて。女房にね
 あくんと思これぬりぬれた事あり。男の見負多くあ

論語註

50 1 2 3 4 5 6 7 8 9 40 1 2 3 4 5 6 7 8 9 30 1 2 3 4 5 6 7 8 9

のやうな女があらばと思はれはやくに重事あり。中して
 女中の長負借へ自分の物好にする櫛笄帽子衣
 裳帯女中言まへ入やうに体俗して。御屋敷方
 女席娘もまね致さうやうと預あり。然り同一女
 子と思はれるが。女中長負あり
 一院終性生のまゝ湯に入。髪を洗。月代く衣裳改
 帽子をわけ。枕もとて百万遍をくらへ。芝居のもの
 どもに咳をして終りしとある

花実又十相傳

一市川海老蔵曰。昔我五席の役に傳あり。二番と對面乃
 時飛かんとする。和比奈を返す。五席の公ハ二番と敵を
 名をうす。勝負せんと言せるむらりにて。その座よて
 殺らる。そのハ敵討ハ見事振てする。心陰言葉業の
 契約せんと思ふ。故依て刀の柄に手とわけぬもの
 あり。草摺引ハ手に力競にて引合。心に草摺切る。
 對面を返す。和比奈を返す。五席が脇が切ると也

一角茶髪の荒るうへ娘の酒に酔たるを持てするあり

あり
一白眼糸に目を困てはくむ時に用はるなりと別也

一真直に正面とむけは弱足へ三角に踊るれがつよく

る之海。急角何く半は。是とあけあすかよー

一隈どりの太がよし。地の白粉の隈どる時に班かよー。お粉

かうもたがよし。濃く黒く足はあり。髪は死と監かよし

生黄の毒あり。眉をまへ梳あぶらあり。白粉をくを

追いうると死の白粉をく紙とて拭つくれが付あり

一目の角の毛は隈どりの元三角あり。去方へ御容の

くり持に糸した。色くの面赤地をば知くはてい

かん大菱とりよ面の目録。第何れて二第あり。うよく死

しる。聖日楽屋よて隈どりをゆりて目の睡をよせ

一丸。きんぐ。悪妻故糸にあらゆれを直に丸く仕たり

是二十一の時よてその隈どりを踏あり。

一荒車へ上下にても。徒洗が強くはあり。年あては

命吾性



病に降故荒事に入色足袋と冠ひら。下衣は
 漬黄がよし。白へ弱ものあり。すべて七の八つの子供のまね
 して使者の中経より下目をほあり
 一荒事の隘事入器アヤに惚られほふこそい悪一
 之紙に被惚る唯あどけあに惚られるま持よて
 するがよし

一荒事のたきだ。漬黄は紫の緊更。又ハ紫のひど死
 がよし。短ひきに入んきうも仕立上引あげ自惜に

よく慢の勇えあるあり。素糸上下あてに下結を
 はくがよし。下結に傳あり。表に木綿に
 結を入結はけは事あり。右鼻緒ハ實一と
 結。素糸絶乃とれも荒事ハ胸あて小手がよ
 し。柔弱全質ハ手袖とくろろろあり。胸あて
 の上より襦袢を思がよし。襦袢ハ半そでが
 よし。略のとも荒事ハてろろ股引がよし。
 略ハ草物悪し。木綿に白衣の裏付捨がよし。

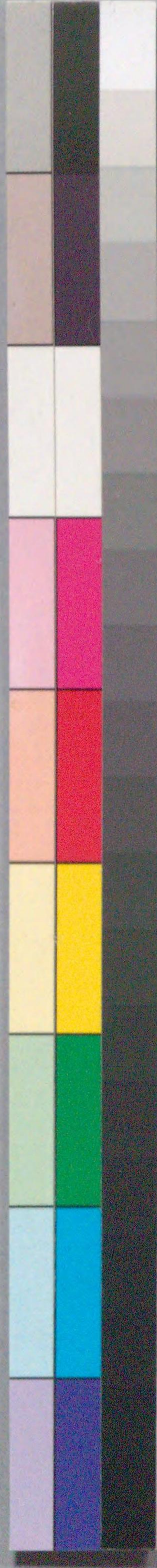
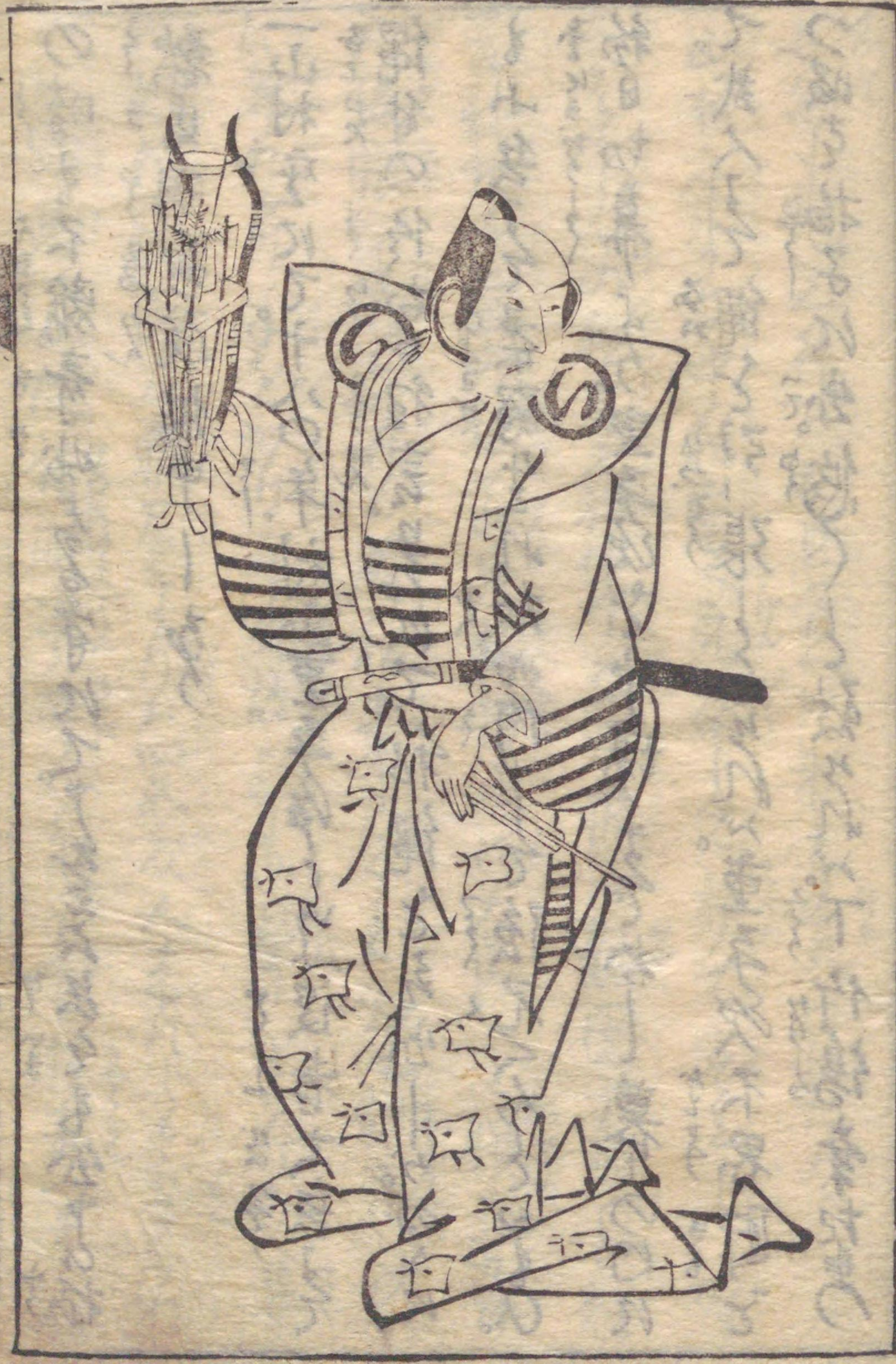




あり
 一 幸年 他者 春狂言に 重忠に あきとり。重忠は
 三 幸の 津に 訥子より 外遊し。つもれど、京清
 一 幸の 京思 被下 登り。美京清とて 祐経に 依
 一 幸 狂言 あきと 勤へり。我木 舞に 不合 役へ 人よ
 一 幸 先へ 知る もの こそ。不合 役へ 出々 しても 役は
 一 幸 然り あり
 一 山村 長を ま芝居 して 十六の 年 始と 目し

うアんと。たんととり。唐人の役。目切とあず。且次
 の 替猪の 早太が 猪の 小泳太と。悪役とてさき
 一 幸 腹まし あり。母に 父に 別。そ 方百 あり。すまは
 一 幸 足物 致 同 友と。憎 ぐり。母の 名 古 成 法 名 栄 光。目 黒
 一 幸 山 行人 坂 隠 居。朱 林 庵。と。別 荘と 建 田 地
 一 幸 付。小 げ ち。と。一 幸 年 百 あり。き せ。と。あり
 一 幸 一 勤 馬 余 詣 仕 じ 時。別 當 私と 御 免。ある あり。お せ 有
 一 幸 登 た 者 と 守と 下 され たり。げ 守 湯 入 と した も。ま 婦 麻

論語集



あれものよ。是入者入者ところあり

一役者ハ大庭あるが事一あり未あせす人多たはあ付

垂たれバ下手の上レ下手と見らるるあり。借接あるはあ

て歩行バ。下手よてもよてもあはし。舞臺教より

地敷ハ皆悪むものあれバ随分人々に不れ思や

にして。舞臺よて日本中の人々に不れし。役者ハ

公成ふが事業あれバ。四ノ屏相意のたのしきと

他く出ぬが事ハ世の事一。他く出ぬバ亦身も清す。後

もえず。役者ハ不物ものあれバ。不みハ随分借接奇

幕にするがよし。多たはあ付ハ既中を。中年より復

面改中。年よりては。身と大をうに持ハ者ま

へなく。不物と能ハ者にて。根付に満園を付て

見せれば。まづけに能ハるる。そのまをまえくのをも

あり

一成田山不勇尊に親よりハ。能役者に依下さるる。一と

死つし。親因十所ハ八百。格者ハ千式百七十。一。

論語魁

廿六





までおれ今あつらひ覚か覚て親おやより能よくハ勿な騎ま事ことあり。其その
時とき成なり田た山やまの幼おと一ひと神かみ統と々々ハ省しやう一ひととあり

一ひと甲かぶささややるる甲かぶ曰いるる我われ十じゆ席せきの役やくに侍ざむらひ行いらる。歌うた付つままてハ
刀やいばにまハけぬものよそ。扱あつかにも指さし添そむら扱あつかものあり
輪りん衾しん此こゝ大だい名なよい何なに事こともも。勝かつ思し手て持もちて何やまる

るる中なか一ひと生せい醉すいの附つけ合あいてするあり。歌うたに違ちがへぬ。
まま方かたでも誤あやま心こゝろあり。随ま方かた強つよすまき事ことあり
一ひと傾かた城じやう賀がの担たん言ごんのとたへ。柵さく灯とう持もちより先ま行いをまて

一ひと可か愛あい者ものハ目めとんれば可か愛あい足あく悪地ち者ものハ鼻はなとんれば悪あく
アアるるあり
一ひと侍ざむらひの役やくももハ後あとをまと居がよし。論ろんのとたへ刀やいばとまを

ううりぬがよし。扱あつかてハ弱よわ一ひと
一ひと阿あ人にんハ版ばんをまと起がよし。喧けん嘩わの時ハ扱あつか指さしをひぬ

くく。そそんんちちゆゆとえせりぬハ阿あ人にんより外ほかおれた言をまあり
一ひと生せい研けんハまとて物ものハよし。生せい研けんハま遠とほハ別ども

論語



言言

一 遠と尊ハ別あるあり

一 尊ハ盲の意持てて身と目にすれば尊と之はあり

一 座既ハ袷丈親のひらゝぬやうに心に切りか入すれば

身をみとるるあり片目づゝみく明暗く一を執りぬ

目を煩ものあり

一 瘡ハさしすをろ。切きくけと此文字をとり瘡あり。

あぬう急をはひらばはらりるれろまみむめもたちり

てとひら瘡らず外の字と瘡バせりぬゆゑ兼只に

不ものあり物を出す時先膝とたて。柏子をとる

物あり。

一 蹠破ハ膝をやめてくもく。変見片膝とをきとた

方カを入片足を力をく歩行ハ真の蹠破に見る

あり。蹠破隠す意持がよ

一 武士の老人ハ膝の折急やれすれば老人あり。ま

町人の親仁ハ膝を曲て歩行ハ親仁あり

一 女形の役とつゝハ先女のみ孫とするが役あり。だろ

論語



ある如く夜道せば脚の物より用ゑん。犢鼻の袴たづなの
 のをすするが中一を割れても奇麗に足るあり
 一振ふるに八斤はちしん足たりして立た片足ひとあしを振ふるば自由じゆうに振ふるあり
 一畜生ちくせいを足たりに爪つめをて歩あ行りがよし長ながのきぬ人ひとの爪つめをてか
 鈍鈍に見みるる。踵かかとにて歩あ行りても同じやうに足あるあり。
 一是これとぬきりぬも。重忠ちゆうちゆうハ謀まにてぬ。祐経ゆうけいハ威勢いせいをと
 いてぬ。是これこそ方かたあり
 一トと手てとつれはら。完子まことと手ての道みち元もと藤ふじ之の物ものあり。

トと手ても上う手てもつれぬものあり
 一巾通しんつうの巾しん。袷あじ付つめて足あ物ものに差さ言ごらさんさんととつら
 了りょう簡かん遠えんあり。と無理無理に何なにとををててハ。お手の邪よ魔ま
 にぬりやがるあり。先まお手の立た物のままに入いやれすれば。
 其その立た物もののものも其その者ものををお手にして。役やくハだけそれ
 こそ能よくあり。其上その上見み物ものに差さ言ごららなり
 一師し近ぢハ袴はかまのどじ。子この袴はかま木きあり。小こ袴はかま木きこそ
 一本いっぺんの香かああず。少せう石いしををれば石いしほどに写うつりな袴はかま

論語

おほいどい手煉して撞ぶより里手を時と知るあり
一本にえまねとすのい根より魚は役者の内より上
手ある者のゆゑをするがよし。まねとも及んず器量も
まより勝れあは。終事になりあるあり。的と體も目下
下と體。矢の的に中はあり

一柏子の能役者の魚。又柏子のあはに役に立む。體
柏子といふあり。柏子能ハ巨魚あり。
一舞臺下もそのあはに。切あはして器量及物をまへ人

あいて
お手にして。一日狂言をすれば能出来ものあり。大勢
いお手にあはるものあり

一役者の能ハまへ人もあり。狂言するうハ皆好あり。
きしひあはれば役者にあは。能ハ皆上手にあはれ
しうあものあり

一立物にあはる。能僕にそまに下法と提歩は
よし。易尺ゆれば人が善魚を去る習俗あり。
又能あはるも寒暑一色あはれば海あり。衣裳ハ

随方忌交ものあり。奢てい芝居新兼ものあり。
 長者にありて金持の名を跡がよく。上子の名と
 跡がよく。思案て有るあり。不取忌よりの衣裳を
 忌。金よりの藝と持がよし
 一茶也しくい俳諧師是負くそ同々る。貴根藝公ハ
 急角栢透より面白くと中人多し。何故栢透ハ
 を根より上よそひやと尋られ。記子答曰。されが
 武士町人百姓宗近坊主老人名人似城女房娘

不踏の字に入やうに藝を致事。芝居の好も。私
 藝ハ子供くハ通し不中。是故栢透ハ先之を中ハ
 利あり事ハ先にぬひんと致せば藝の外にだんく
 工夫致事ありといしあり
 一役者四十八條を冊。上手道下手道も冊。何も訥
 子他。舞其至藝の講釋。月に三交り有しあり

以上



○天首ひびより上手うま名人の役者やくしや数多ありといふもまへ
不見世よの妙傳まぎはく。眼氣まなまに数年見ぬのたる拍筈はくは。訥子
これ。江戸は輪の太立物わづ。荒事あらい和事わじの閑山かんざん役者
の鑑かみと是と定さだめぬ名人も。又出来間敷きま事ことうい

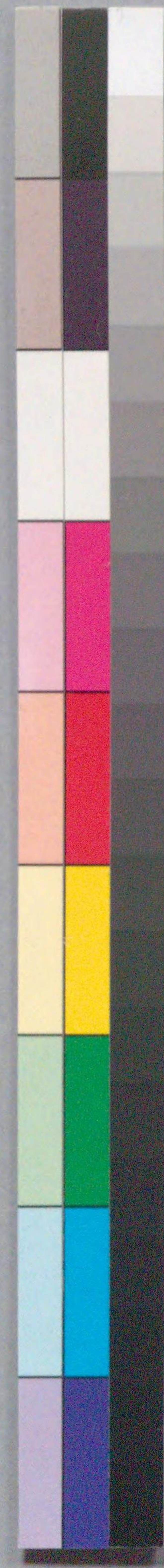
（Faint bleed-through text from the reverse side of the page, including characters like 天首, 上手, 名人, 役者, 数多, あり, といふ, 見ぬ, 拍筈, 江戸, 輪, 太立物, 荒事, 和事, 閑山, 鑑, 定めぬ, 名人, 出来間敷, 事うい）

論語魁跋

吾われも訥子ねつし小回せうわい。如ごとく今いまある仕しぬと云いて
能者のうしやに可た從したがや。訥子ねつし曰い。実まこと子ことをしる。実
急いそげ退ひ和事わじ成なり打うて。能者のうしやに去いる。小
返こへし。吾われも曰い。何なにと云いふ。子ことをしる。訥子ねつし曰い。
二ふた手てハ藝ぎさう終はりも。無なれど。不ふ當たうも
定さだめぬ。人の仕しぬは念ねん念ねんと。高たかきまなれども
不ふ通つう。位ゐりも能のう。暗くらもよ。吾われも曰い。

論語魁

跋



208
合 1
32

諸言免

是法款ワケ後ノチ々々。善法ザンポフ知チずむハひて
為ナリ役者ヤクシャ事コトありし。精セイ法ポフ出デさすハすバ
以モて之ノ物モノとシてモありし。切キ法ポフ經キョウんバ
以モて善法ゼンポフ元ゲン事コトありしとシてモ魁カキ法ポフ好コトにシて

明治九年正月

東都近仁齋新翁撰

賣所

本材木町三丁目
大坂登久五席
四日市廣小路

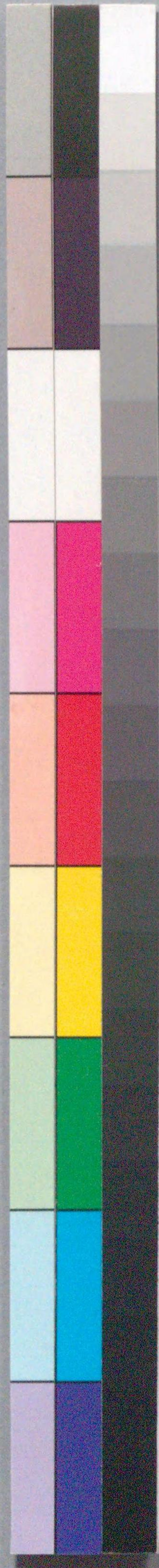
古今役者論語魁下終

竹川 友助

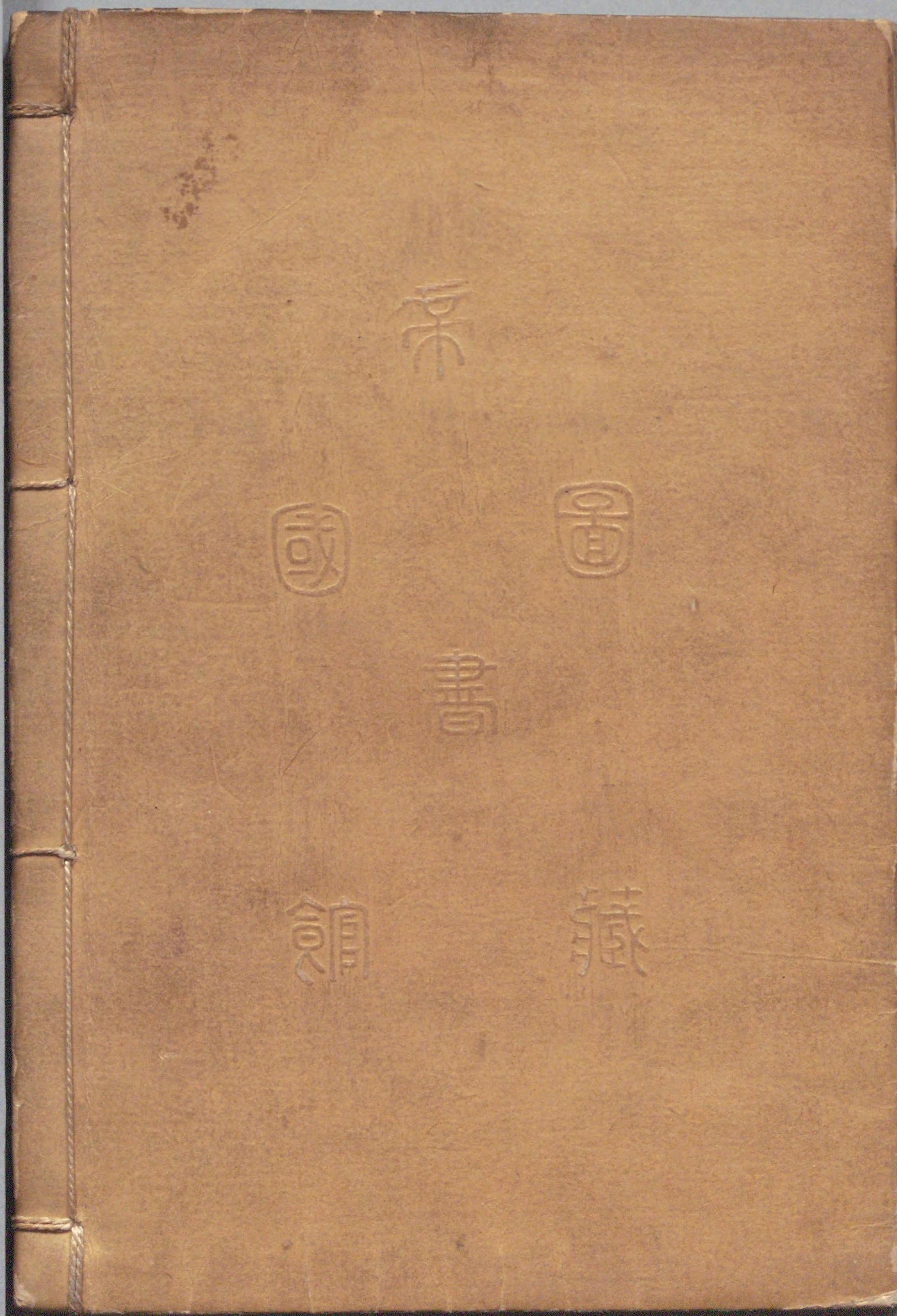


208
台1
32





国立国会図書館 古今役者論語魁 2巻 208-32



ガラス使用

